

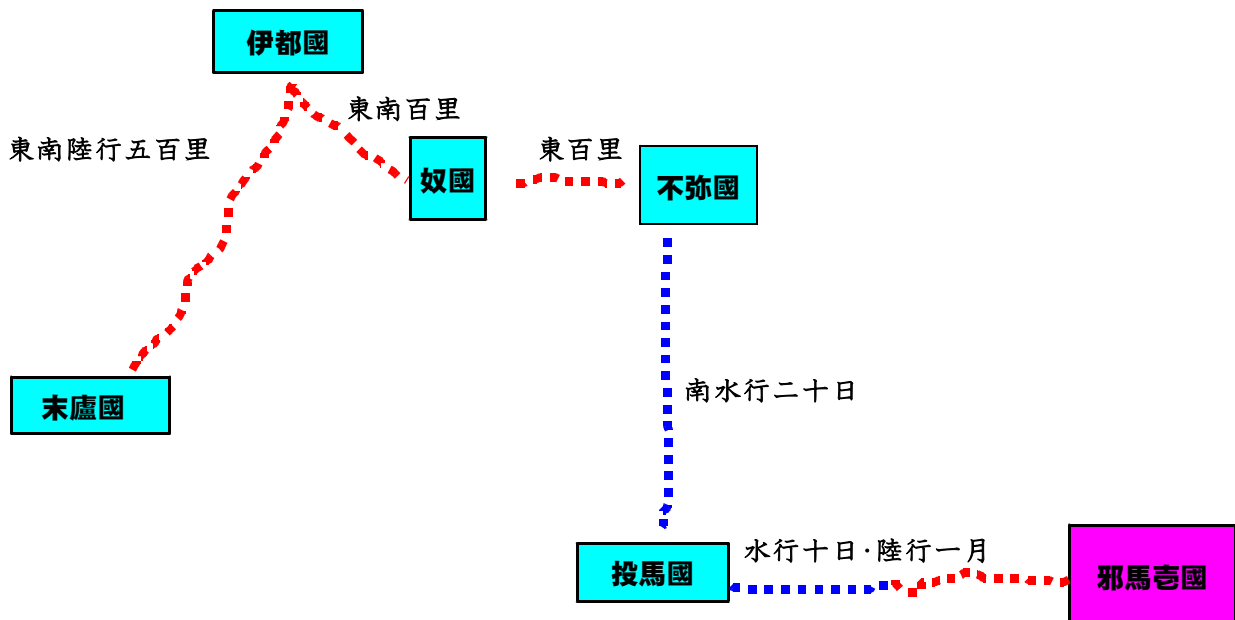
邪馬台国論

2章 邪馬台国女王卑弥呼

絶対認識を曲げず

邪馬壹國・奈良説批判

『魏志倭人伝』・邪馬壹國への行路は様々に解釈されているが、大きく九州説と奈良説に分かれる。奈良説のロードマップを作成して検討してみよう。代表的なロードマップは次のようになる。



原文改訂その1 「東南陸行五百里伊都國」

直木孝次郎氏の比定に従って「未廬」を唐津、「伊都國」を前原町としてみよう。そうすると「未廬(唐津)」から「伊都國(前原町)」への方向は東北となる。原文は東南である。すでに第一歩を踏み外している。この先どのような進路を経ようとも、魏志倭人伝の「邪馬壹國」へ行き着くことはない。

原文改訂その2 「南投馬國水行二十日」

奈良説は、「伊都國(前原町)」-「奴國(博多)」-「不弥國」-「投馬國」と、順次進んでいる。「投馬國」はどこに比定されているか。

諸説あり。九州説では薩摩(殺馬・設馬のあやまりとする吉田博士)、日向児湯郡都万神社(本居)、筑後上妻・下妻・三瀨(太田氏)など。大和説では周防佐婆郡祖郷(内藤博士)、備後鞆津(瀬戸内海、三宅博士、志田氏)と出雲・但馬(日本海、山田博士)などに比定されている。(『魏志倭人伝・岩波文庫』)

「投馬國」は周防佐婆郡、備後鞆津或いは出雲・但馬に比定されている。しかし、「投馬國」は「不弥國の南二十日の水行」の所と書かれている。東ではない。「不弥國」を九州のどこに比定しようと、これら投馬國の比定地が「不弥國の南」とはならない。例えば、「不弥國」を博多の近く「筑前粕屋郡宇瀨」(本居・吉田・内藤)とする。「投馬國」となる周防佐婆郡、備後鞆津は東である。また出雲・但馬は東北である。南ではない。原文と異なる。



原文改訂その3 「南、邪馬壹國に至る」

奈良説では、「投馬國」の次に「邪馬壹國」がある、と読まれている。「南、邪馬壹國に至る、女王の都する所」という記述を、「投馬國の南、邪馬壹國に至る」と読むのである。この読みはあり得る。『魏志倭人伝』の表記方法から考えると、この読みの方が妥当だといえないことはない。このように読めば「邪馬壹國」は「投馬國」の南に存在する國となる。「投馬國」が周防佐婆郡、備後鞆津、或いは、出雲・但馬であるならば、その南に「邪馬壹國」を想定しなければならない。この場合、奈良が「邪馬壹國」となることはない。原文を修正し、また、修正して邪馬壹國奈良説が成立する。これだけ修正すれば、「邪馬壹國」は全国のどこにでも比定できる。

それ故、方向は「南」と書いているが、「東」の間違いだと考える人がいる。その根拠は『隋書倭國伝』にあるという。この史書には、「又東一支國、又至竹斯國」と記述されている。現実には、「一支國(壱岐)」は対馬の南である。ところが、『隋書倭國伝』では、東となっている。これをとりあげて、『魏志倭人伝』の行路における「南は東のまちがいた」と解釈する。そして、「邪馬壹國」は「投馬國」の東となり、奈良に落ち着くのである。

しかし、南と東を取り間違えたのだ、と根拠とする『隋書倭國伝』の行路は『魏志倭人伝』の行路と異なる。『隋書倭國伝』における隋の使者は、対馬－壱岐－唐津と渡ってきたのではない。彼らは韓国内を陸行しないで東シナ海を南下して、朝鮮半島の南の海を東に航海して壱岐に来ていたのである。従って「又東一支國、又至竹斯國」と書いた。この航路では、壱岐、「竹斯國(博多)」は東となる。方向認識は全く正しい。問題はな

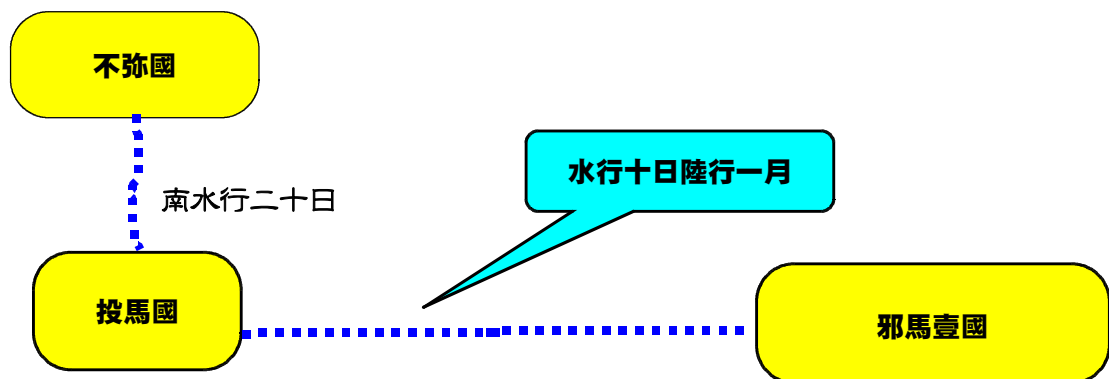
い。

『隋書倭國傳』に於ける航路は、「東一支國」で正しい。しかし、『魏志倭人傳』の行路は、金海－対馬－壹岐－末廬である。この行路では「対馬の南が一支國」が正しい。「南、邪馬壹國に至る」は正確な記事である。



邪馬壹國奈良説は道理が引っ込む

邪馬壹國は投馬國の先にある國だと考える研究者が多い。邪馬壹國の奈良比定者のほとんどはこの理解に立っている。この場合、「南至邪馬壹國」の「南」は無視され、「東」のまちがいと解されている。



しかし、このような行路の想定では、『倭人傳』の唐津からの陸路が意味をなさない。「末廬」から「伊都國」への「東南陸路五百里」、また「伊都國」から「奴國」への「東南百里」、「奴國」から「不弥國」への「東百里」の

陸路が必要必然ではない。そんな陸路を歩む必要がない。

もし、奈良に邪馬壱國が存在したと仮定しよう。郡使は壱岐から船に乗って来た。「末廬」に寄港する。そして、「伊都國」に寄港する。そして、「不弥國」に寄港する。そして、「投馬國」に寄港する。そして、ついに、「邪馬壱國」に到着する。このように全て海路でいい。唐津で船から降りて陸地を歩く苦勞なんか全然する必要はない。



「末廬國」を唐津、「伊都國」を前原町、「不弥國」を博多、「投馬國」を兵庫県の但馬、「邪馬壱國」を奈良と想定しよう。あなたが壱岐から奈良に行くとする。唐津で下船して九州北岸を歩いて博多まで行きますか。何か特別な事情があれば別ですよ。何もなければ壱岐…唐津…博多…広島…岡山と船で航海して「投馬國(但馬)」まで行くでしょう。この間、どこに陸路をとる必要がありますか。『魏志倭人伝』の行路は現代地図で比定して道理が通る行路でなければならない。

『倭人伝』の「邪馬壱國」が「投馬國」の次に存在するのであれば、壱岐から直接、「投馬國」へ航海して、そこから「邪馬壱國」へ行くことになる。「末廬」も「伊都國」も「不弥國」も特に必要ではない。だが、「末廬(唐津)」に寄港する必要があるだろう。長い船旅だから唐津寄港もあるだろう。しかし、次の「伊都國」までの500里を陸行する必要はない。船旅に疲れたから、陸路を行ったのだ、と好意的に考えても、「伊都國」から次の「不弥國」までは陸路に行く理由はない。「不弥國」から「投馬國」への二十日間の旅が待っている。こんなところの陸路を歩いて時間を消耗する訳にはいかない。

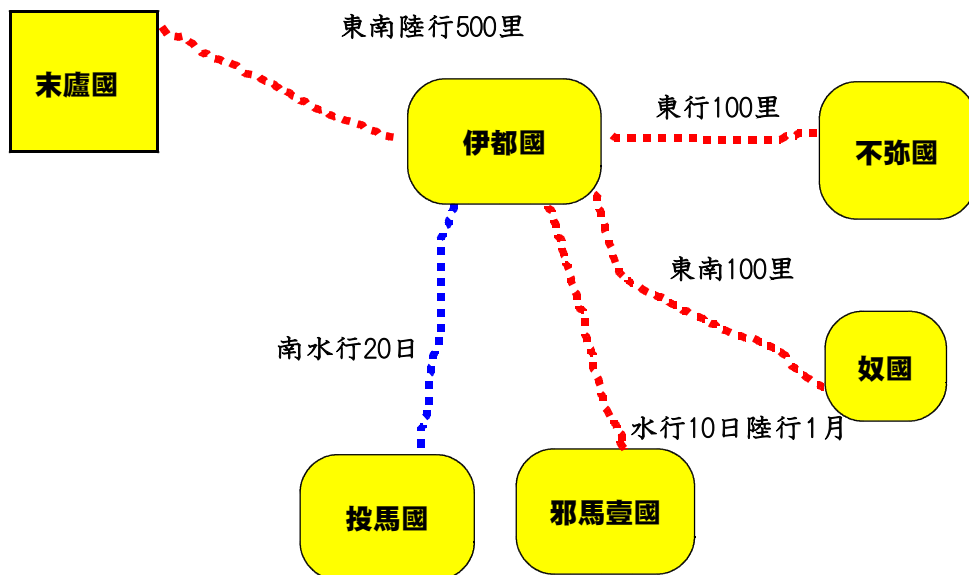
「投馬國」の次に「邪馬壱國」が存在すると解釈する場合、日本列島のどこに「投馬國」を想定しようと、壱岐から直ちに「投馬國」へ行けばいいという道理は変わらない。日本列島は海で囲まれている。我が国のどこに「投馬國」があったにせよ、その東に或いは南に「邪馬壱國」が存在するというのであれば、壱岐から来る郡使は他に立ち寄らず、「投馬國」へ直行したであろう。壱岐から「投馬國」、そして「邪馬壱國」へ、これでOKなのである。むしろ、「陸行」の行路を記載しなければならないのは、「投馬國」から「邪馬壱國」への路となる。この陸路を

書かないで行路とはいえない。だが、『倭人伝』にはこの陸路は書かれていない。「南至邪馬壹國」と簡単に書いているだけである。「投馬國」の次に「邪馬壹國」が存在したという読みはとんでもない勘違いである。

「邪馬壹國」が奈良に存在したと想定しよう。この行路で絶対必要であるといえるのは大阪である。上陸ポイントは大阪を除いてはない。もし、「邪馬壹國」が奈良に存在したならば、『倭人伝』は「大阪上陸」を必ず記載したに違いない。上陸は、「末廬國」ではなく、「難波國」である。そして「東南陸行五百里」と書いたであろう。



榎一雄氏「放射線行路」批判



榎一雄氏の説は放射線的な行路である。「伊都國」を中心に、「奴國」「不弥國」「邪馬壹國」「投馬國」が放射線状に存在するという解釈である。苦心の解釈ではあるが、目的地を示す行路図で、古今このような行路図があったためしはない。『魏志倭人伝』は帯方郡から邪馬壹國までどのようにして行けばいいのかを了解する必要から書かれ伝記である。従って、倭人伝を読む古代中国の人は「邪馬壹國」がどこに存在するか把握することが出来た。「邪馬壹國へ行け」と命令されれば、『倭人伝』の記述に基づいて邪馬壹國へ到着することができたのである。行路は簡潔明瞭、且つ、要点を外さずに書かれている。

榎氏のように、行路は放射線状に書かれていると解すると、伊都國から邪馬壹國へは「水行十日陸行一月」という旅程となるが、この旅程で、一体、誰が、伊都國から邪馬壹國に行く着くことができるであろうか。40日の長旅の方向も、途中経過する國の名前も記さずに、「伊都國」から「邪馬壹國」に行くことが出来るわけではない。これでは、いざという時、何の役にも立たない。

「水行十日陸行一月」とは帯方郡から邪馬壹國への総日程である。故に、この記事は「邪馬壹國に至る」と書かれた次に書かれている。韓国内での水行と韓国から対馬、対馬から壱岐、壱岐から唐津までの水行と韓国内の陸行と九州内の陸行で「邪馬壹國」に到着した。その日数は全部で40日ですよ、と教えているのである。

「帯方郡から邪馬壹國へ行かねばならなくなった。」

「そうですね。だがいくら急いでも四十日ぐらいは見ておかないとだめですよ。もし八月の始めに邪馬壹國に着きたいのであれば、六月の中旬にはここ帯方郡を出発しなければなりませんよ。」

このようにガイドしているのである。「水行十日陸行一月」は、要領よくまとめられた旅程の日数である。

榎氏のように伊都國から40日要して邪馬壹國に到着するというのであれば、帯方郡使が伊都國に常駐する必然はない。郡使は邪馬壹國にもっと近い國に常駐したであろう。これでは、まるで、日本の首都東京を訪れる各国大使が常駐する所は沖縄であるというのと同じではないか。各国大使は東京か東京にごく近い都市に常駐するであろう。

一里の長さ

「奴國」と「不弥國」については「伊都國」からの方角と距離が明記されている。距離を表す1里とは、およそどのくらいの長さなのであろうか。『魏志倭人伝』には韓国から対馬、対馬から壱岐、壱岐から唐津への距離が書かれている。現代地図でみれば、それぞれが「千余里」というのは誤差がある。明らかに、壱岐－唐津間は短い。

現代の計測では、唐津呼子港－壱岐印通寺は26km、対馬－釜山は50km、博多－釜山が132kmである。『魏志倭人伝』の韓国－対馬－壱岐－唐津の距離が完全でないことは明らかである。だが、陸地は歩いて計測できる。

『魏志倭人伝』の1里の長さについては、「倭韓の里は古周尺の尺度で一里＝100メートル」という立命館大学教授、藤田元春氏の説が妥当である。氏の説のように、『倭人伝』の里は、韓国と日本で共通しなければならない。

榎氏の放射線的な行路解釈はありえない解釈である。榎氏の説では奴國や不弥國は全く記載する必要がない。40日離れた邪馬壹國への旅程の諸国を記載するのなら意味がある。邪馬壹國への行程が分かるからである。榎氏の解釈があり得ないことは、実際に現代地図に書き込んでみると明らかになる。

。



この地図では「奴國」「不弥國」は掲載意義がない。別に云っても云わなくてもいい國である。記載すべき國は瀬戸内海沿岸にあったであろう。また、上陸地点の大阪は記載必然であろう。

現代の旅行会社が作成する行程表は、放射線的な行程表などは皆無である。全て出発地から目的地へ直行するルートを書くだけである。

東京－名古屋－京都－大阪－神戸

このような旅程を作るだけである。古来、放射線的な行路などあったためしはない。旅程は出発地と目的地への旅程を書くものである。

『倭人伝』は、「郡より倭に至るには」と書き出している。「郡」が出发点、目的地は「倭」である。「奴國」「不弥國」は必ず通過する国だったから記載必然だったのである。榎氏の放射線読みは行路という本質を外したありえない読みである。